



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『後撰和歌集』の親疎関係：巻一～巻十を対象とした諸本分類を中心として（前）
Author(s)	柳田，健一
Citation	国語国文研究，131，32-48
Issue Date	2007-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93486
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_131-32-48.pdf



『後撰和歌集』の親疎関係

—— 卷一、卷十を対象とした諸本分類を中心として —— (前)

柳 田 健 一

一 はじめに

藤原定家自筆の天福二年本『後撰和歌集』卷三春下九五番歌は以下のようにある。

はるのくれにかれこれ花おしみける所にて

かくなからちらて **世をやはつくしてぬ**

花のときはもありと見るへく

(網掛は筆者。三四、三五頁 一四ウ、一五オ)

網掛の部分は文法的に説明しづらく、このままでは解釈が困難である。そこで、右に記した定家自筆の天福二年本の忠実な透写本とされる国立歴史民俗博物館蔵(高松宮旧蔵)本を底本とした現代注三種は次のような注を付しつつ、歌本文を立てている。(傍線・網掛は

筆者。)

木船重昭著『後撰和歌集全釈』

かくなから散らで **世をやは尽くしてん**⁽¹⁾

花の常磐もありと見るべく

(注釈) 「世を尽くす」は生涯をおえる。へやはは疑問の「や」と強意の「は」。へてんは底本「てぬ」。意味不通。堀河本により訂す。へては強調の助動詞「へつ」の未然形、へんは可能推

量の助動詞「ん」の連体形。

片桐洋一校注『後撰和歌集』⁽³⁾

かくなから散らで **世をやはつくしてむ**

花の常磐もありと見るべく

(脚注) 底本はじめ定家本系統の諸本には「世をやはつくしてぬ」とあるが、打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」が完了の助

動詞「ぬ」とあるが、打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」が完了の助

動詞「つ」の連用形「て」に接続する例はない。そこで、白河切・堀河本・片仮名本・承保三年本・伝正徹本などの「ちらで世をやはつくしてむ」に従つて校訂した。世をつくしてしまおうか、いやそんなことは出来ない。

工藤重矩校注『後撰和歌集』

かくながらちらで世をやはつくしてぬ

花のときはもありと見るべく

(頭注) 散らないで一生を尽くさないか、そうして欲しい、と呼びかける語法。→八三補注(底本「む」とあるが、文脈上「ぬ」であるべきなので、改めた。「ぬ」を「む」と表記する例は写本に時折見られる現象。)

木船・片桐両氏は本文を「世をやはつくしてむ」と改め、工藤氏も底本のまま立ててはいるものの解釈上は同様の本文を想定している。三氏の解釈の是非はさておき、問題はそのままでは解釈の困難な底本の「世をやはつくしてぬ」の本文処理の仕方にある。

かつて片桐氏⁽⁵⁾が定家の嘉禎二年本『後撰和歌集』の本文成立に関して

「いいたい、定家は、本文に不審があつても、「如此事只従本」と言い、「不可直改」と断っているように(承久三年本奥書その他)私意のみで本文を改竄しなかつたことは確かである。しかし、彼が本文を問題とするのは、いわば問題のある箇所に限ら

れており、その部分の疑問を解決する本であれば、その本来的系統や性質など問題にせず、それによってその部分のみを改めるという態度であつた。

と述べたことを前提とするならば、定家は当該の「世をやはつくしてぬ」に問題があるとは考えずに天福二年本を(校訂)書写したと考えられる。それに対し、現代注の校注者は本文に問題があるとし、木船氏は(おそらくは他の非定家本系統と言われる諸本の本文状況も参考にしつつ)「堀河本」に、片桐氏は「白河切・堀河本・片仮名本・承保三年本・伝正徹本」の諸本の本文によつて「世をやはつくしてむ」に本文を校訂する。唯一、工藤氏は「世をやはつくしてぬ」のままで本文を採り、写本において「ぬ」と「む」の「混乱」(「通用」⁽⁷⁾)ともが時折あることを指摘した上で、「世をやはつくしてむ」で解釈をする。

この一例によつて(どのように諸本を取り扱うかによつて違いは出てくるだろうが)、天福二年本を代表とする定家本系と非定家本系諸本の本文に対立が見られる場合、どちらの本文を採るべきか、また非定家本系諸本の本文を採る場合どの本に拠るべきか、明確な指針が未だ確立されていない状況がすけて見える。言い換えれば、『後撰和歌集』の諸本研究には大きな、そして根本的な問題が残されているのである。

『古今和歌集』を先蹤とし、それから約五十年後の天暦五年に撰集を開始し、我が国で二番目の勅撰和歌集として成立した『後撰和歌

集』の現存諸本は、多くの問題を内包し、古来より様々な点から論じられてきたと言えるだろう。例えば、序が無いこと、詞書における作者名表記の諸本間での揺れ、『古今集』所収歌との重出、及び集内和歌重出、部立や配列の乱れなどを根拠に、現在では未定稿説が有力でもある。

諸本研究においても、『後撰和歌集』の諸本の系統は、他の勅撰集より多岐にわたっているとはいえ、その各系統本間の差違も著しいものがあり、系統分類を含め、諸研究者によって意見が分かれるところも多々ある。主な先行研究としては、松田武夫氏、日野西資孝氏、岸上慎二氏、片桐洋一氏、杉谷寿郎氏等の著述が挙げられ、系統の名称も諸研究者によって若干異なってくるが、ひとまず杉谷氏の説に従って、分類を記すと以下になる。

一、汎清輔本類

- (一) 二荒山本
- (二) (1) 片仮名本・(2) 伝慈円筆本・(3) 承安三年本

二、古本類

- (一) (1) 白河切・(2) 堀河本
- (二) 胡粉地切
- (三) 行成本
- (四) (1) 烏丸切・(2) ①慶長本・②雲集本

三、承保本類

- (一) (1) 無年号本A類・(2) 無年号本B類
- (二) (1) 承久三年五月本・(2) 貞応元年七月

本・(3) 貞応元年九月本・(4) 貞応二年九月

月本・(5) 寛喜元年四月本・(6) 天福二年三月本・(7) 嘉祿二年一月本

本論は、これまでに述べてきたような研究状況にある『後撰和歌集』諸本の本文を比較することにより、従来の分類の正否と各諸本の系統関係、親疎関係、及び各諸本の性格等を明らかにしていこうとする試みの始発である。

なお、本論の諸本研究の方法は、宮澤俊雅氏の一連の研究によって示された古典字分け遡源法に従っている。

二 所用の諸本

今回取り上げる諸本は以下の通りである。(書写年代は杉谷氏による。)

一、汎清輔本類

- (一) 二荒山本 日光二荒山神社蔵 二荒山本 藤原教長筆本
- 略称としては(二)を用いる。(以下同じ)。一冊 巻十までの零本 六六〇首 ※平安末期書写

高橋良雄・杉谷寿郎『二荒山神社本 後撰和哥集』(昭和六二年、桜楓社) 所収の影印による。

(片) 片仮名本 加納諸平旧蔵現宮本長則蔵本 三冊⁽¹⁹⁾ 巻十までの零本 七〇一首 ※鎌倉中期書写

複製本による（昭七～八年、古典保存会）

二、古本類

（堀）宮内庁書陵部蔵（五五七・四九） 伝堀河宰相具世筆本

上・下二冊 卷二十までの完本

一四二〇首 ※室町期書写 ※堀河具世（？）1439

（1452『公卿補任』）？

国文学研究資料館マイクロフィルム番号 201262

1212「3」による。

（雲）出雲守松平治郷旧蔵 大阪青山短期大学蔵 雲州本 伝

頓阿筆上・下二冊 卷二十までの完本 一四三七首

久曾神昇・深谷礼子『後撰和歌集（雲州本）と研究上・

下』（昭和四三年、未刊国文資料刊行会）の翻刻による。

三、承保本類

（正）天理図書館蔵 伝正徹筆本 ※伝正徹（1381～14

59）写 上・下二冊 一四三五首 卷二十までの完本

杉谷寿郎『後撰和歌集別本 詞花和歌集』（天理図書館善

本叢書と書之部第六九卷、昭五九）の影印による。

四、定家本類

（一）（一）無年号本A類

（中）京都大学総合図書館蔵中院家旧蔵本

※江戸初期頃写 上・下二冊 卷二十までの完本 一四

二五首

京都大学図書館HP ([http://ddb.libnet.kuih.kyoto-u.](http://ddb.libnet.kuih.kyoto-u.ac.jp/exhibit/k06/)

[ac.jp/exhibit/k06/](http://ddb.libnet.kuih.kyoto-u.ac.jp/exhibit/k06/)) の画像による。

（亀）

（2）無年号本B類
武田祐吉氏旧蔵伝龜山天皇宸翰本 上・下二冊⁽²⁰⁾

※鎌倉中期写 一四二六首

岩波文庫 松田武夫校訂『後撰和歌集』（1945・2第

一刷、1994・3第四刷）の翻刻による。

ノートルダム清心女子大学蔵、黒川家旧蔵本 伝月樵筆

本 ※江戸初期頃写 一冊 卷二十までの完本 一四二

六首
国文学研究資料館マイクロフィルム番号 332122

712

（二）（4）貞応二年九月本

（貞）大山寺蔵伝橋本公夏筆本 貞応二年九月二日書写本 ※

伝橋本公夏（1454～1520）筆 一冊本 卷二十

までの完本 一四二五首

『後撰和歌集総索引』（大阪女子大学、昭四〇・一一）所

収の翻刻による。

（6）天福二年三月本

（淨）

尊経閣文庫蔵浄辨本 天福二年三月二日書写本 一冊

卷二十までの完本 一四二五首

複製本（大野本克豊 解説（昭和一一年、尊経閣叢刊）

による。

（高）高松宮家蔵 天福二年三月二日書写本 ※江戸初期透写⁽²¹⁾

一冊本 卷二十までの完本 一四二五首
『定家筆三代集 後撰和歌集』（日野西資孝解説、昭和一

六年、高松宮蔵版)の影印による。

(天) 冷泉家蔵藤原定家自筆本 天福二年三月二日書写本 一

冊 卷二十までの完本 一四二五首

『後撰和歌集 天福二年本』(財団法人冷泉家時雨亭文庫、

冷泉家時雨亭叢書、片桐洋一解説二〇〇四・六)による。

以上一二本は杉谷氏の説による各分類から、なるべく完本に近いもので、影印の見られるものを中心を選んだ。特に非定家本類で完本に近いものは数が少ないので、できるだけ歌数のまとまったものを選んだ。非定家本類と定家本類との間の差違が大きいことはもちろんだが、定家本類内でもその差は著しく、初期の書写のものと「定家がその校訂の最終的な到達点を示した本文」と言われる天福二年三月本とはかなり様相が異なる。したがって、定家の書写した年代が早いと思われる無年号本から三本、比較的早い年号を記すものを一本選んだ。

また、はじめに示したように定家自筆天福二年三月本の影印本が近年刊行されたが、同系統から更に二本を選んで校合にくわえた理由は、自筆本は長い間冷泉家に秘蔵され、公にその姿を現すことなく、その臨模(もしくは透写)本がいわゆる対立関係にある二条家(浄辨本、冷泉家(高松宮家本)それぞれの証本とされ、かつ定家自筆本から直接書写されたことが明らかであるので、その過程でどれほどの異文が発生するかを見届けることも、諸本関係を見定める上で有益であると判断したためである。

一二本がすべて揃うのは巻一―巻十であるため、主に三―七節で

この部分を扱い、巻十一―巻二十については、八節で歌本文のみについて比較検討して、今後の研究の見通しを立てることとする。
底本には巻一―巻十は二荒山本⁽²⁴⁾を、巻十一―巻二十は定家自筆天福二年本を用いる。

三― 卷一―十における一二本の異文対立 1

前節に提示した所用の『後撰和歌集』の一二諸本の巻一―巻十の対立異文を分類及び集計したのが、表1である。

表の第1欄で例数を示し、第2欄の「分類」欄では、0は独自異文、1は双立共通異文、2は鼎立異文、3は四立異文、4は五立異文、5は六立異文、6は七立異文を示す。異文対立を示す欄では二荒山本及びそれと同じものを0で示し、異なるものを123……で示した。

巻一―巻十を範囲とした一二本間での異文対立の総数は二四三三例であるが、そのうち、いずれかの本の独自異文が一〇八一例あり、全体の四四%に及ぶ。双立共通異文は一五六種九九九例、鼎立異文一八九種三三三例、その他一〇七種一〇四一例となっている。

双立異文の一〇例以上ある一三種によって、その異文対立を示せば次の通りである。

二片	対	堀雲正中亀ノ貞浄高天	二四三例
二片正中亀ノ貞浄高天	対	堀雲	七六例
二片堀雲	対	正中亀ノ貞浄高天	六七例

二片堀	対	雲正中亀ノ貞浄高天	六五例
二堀	対	片雲正中亀ノ貞浄高天	三二例
二片雲	対	堀正中亀ノ貞浄高天	三一例
二片堀雲正中亀ノ	対	貞浄高天	二五例
二片堀雲貞浄高天	対	正中亀ノ	二四例
二片堀雲中貞浄高天	対	正亀ノ	一八例
二雲正中亀ノ貞浄高天	対	片堀	一五例
二片堀雲正中貞浄高天	対	亀ノ	一四例
二片貞浄高天	対	堀雲正中亀ノ	一四例
二堀正中亀ノ貞浄高天	対	片雲	一二例

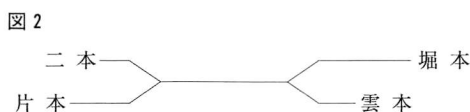
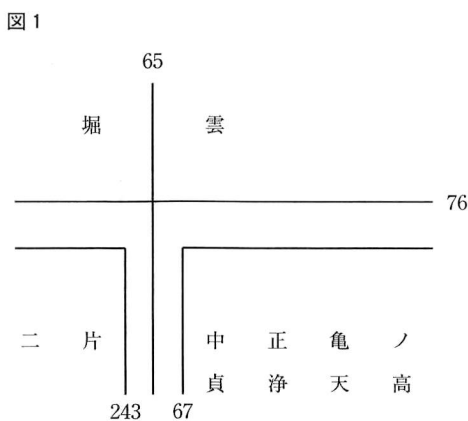
このうち、例数の多い四種で一二本の群立・対立を境界線で示せば図1のようになる。つまり

二片・正中亀ノ貞浄高天	対	堀・雲	七六例
二片・堀	対	雲・正中亀ノ貞浄高天	六五例

の二種の対立が矛盾を来している。これはいずれかの本、又は群の本文が混交状態にあるためと推測されるが、ここではひとまず正中亀ノ貞浄高天を除き、二片堀雲の四本の異文対立（独自異文と双立異文のみ）を表1から算出すれば表1・1のようになる。これによれば

二荒山本・片仮名本 対 堀河本・雲州本

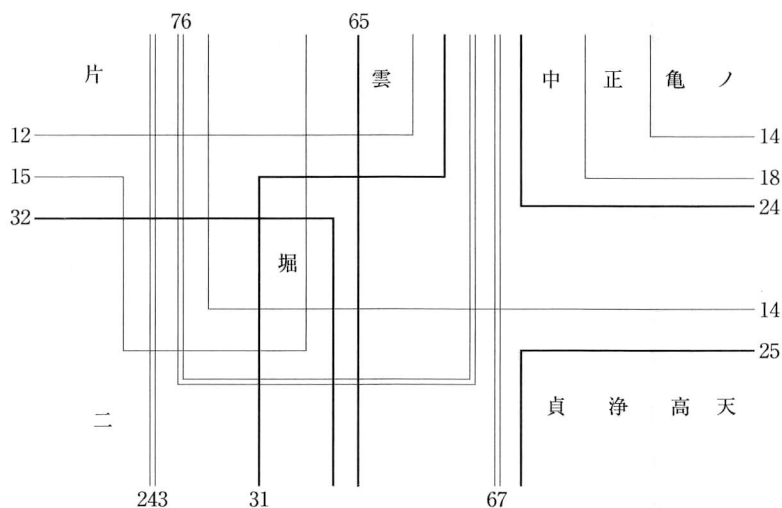
という対立関係を読み取ることは容易であり、図2のような四本の関係を想定することが出来、正徹本・中院本の群に本文混交、言い換えれば校訂本文の存在を確認し得るのである。



三―二 卷一―卷十における一二本の異文対立2

以上のように二荒山本・片仮名本・堀河本・雲州本の四本が明瞭に異文対立を示して居ることを確認した上で、改めて一二本の群立・対立関係を境界線で示せば図3のようになる。これから、先の

図 3



四本の関係とは別に以下の二のグループを見出すことができる。

「グループA」 正徹本・中院本・亀山本・ノートルダム本
「グループB」 貞応本・浄弁本・高松宮本・天福本

この両グループの諸本の本文は、二荒山本等四本の本文と比較すると、いずれも雲州本がもっとも近いことは、表2の相互異文数を確認すれば明らかである。例えば正徹本と四本の異文数は

正徹本と二荒山本の相互異文数 一二六例

〃 片仮名本の 一二五例

〃 堀河本の 一三二五例

〃 雲州本の 一〇四五例

であり、また二荒山本等と天福本との相互異文は

天福本と二荒山本の相互異文数 一二一一例

〃 片仮名本の 一一八一例

〃 堀河本の 一二八四例

〃 雲州本の 九四三例

となっている。両グループの本文は、雲州本系を底本として二荒山本・片仮名本類の本によって校訂された本文の系列に属する可能性が大であると言えよう。そこで両グループの諸本を雲州本を祖系の

表 1.2

例数	分類	雲本	正本	中本	亀本	ノ本
23	0	0	0	0	0	1
34	0	0	0	0	1	0
105	0	0	0	1	0	0
142	0	0	1	0	0	0
696	0	0	1	1	1	1
73	1	0	0	1	1	1
64	1	0	1	0	1	1
38	1	0	0	0	1	1
22	1	0	1	1	0	0
8	1	0	0	1	0	1
6	1	0	1	0	0	1
5	1	0	1	1	1	0
4	1	0	0	1	1	0
1	1	0	1	1	0	1
1	1	0	1	0	1	0

表 1.1

例数	分類	二本	片本	堀本	雲本
393	0	0	0	0	1
528	0	0	0	1	0
194	0	0	1	0	0
220	0	0	1	1	1
473	1	0	0	1	1
60	1	0	1	0	1
33	1	0	1	1	0

位置に置いてその系統関係を推測してみようと思う。

四 雲州本と正徹本・中院本等の関係

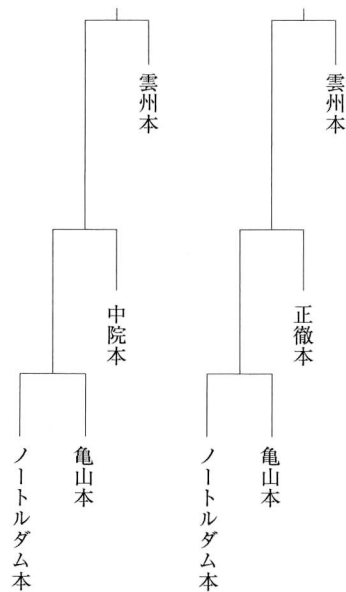
まず、「グループA」について、雲州本を含めて五本の異文対立(独自異文と双立異文のみ)を表1から算出すれば表1・2のようになり、群立・対立関係を境界線で示せば図4のようになる。

雲・正 対 中・亀ノ
雲・中 対 正・亀ノ

の二種の対立が矛盾を来しているが、

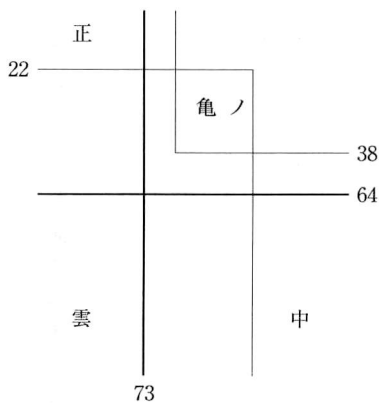
表 1.3

例数	分類	雲本	貞本	浄本	高本	天本
1	0	0	0	0	1	0
32	0	0	0	1	0	0
35	0	0	1	0	0	0
882	0	0	1	1	1	1
31	1	0	0	1	1	1
6	1	0	1	0	1	1
6	1	0	1	1	0	0
3	1	0	0	0	1	1



の、いずれかの系譜を想定することが可能である。従来の分類では、正徹本が承保本類、他の三本が「グループB」と共に定家本類に属せられていたが、正徹本も系統的には定家本類の一変種であるとして良いことになる。

図 4

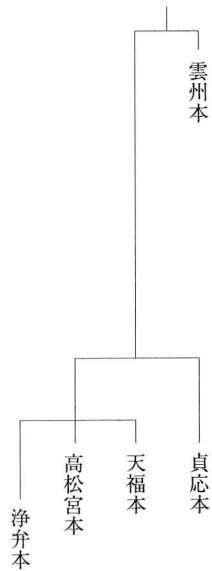


五 雲州本と貞応本・天福本等の関係

「グループB」について、雲州本を含めて五本の異文対立（独自異文と双立異文のみ）を表1から算出すれば表1・3のようになる。

雲州本・貞応本 対 浄弁本・高松宮本・天福本

の対立は明瞭であり、



の系譜が想定できる。高松宮本・浄弁本が天福本のコピー書写であるとする伝承が確認される。

六 雲州本と定家本諸本の関係

「グループA」「グループB」の諸本がそれぞれに雲州本からの系譜を想定できるようになったので、さらに雲州本と両グループ合わせた九本の関係を検討することとする。五本の異文対立（独自異文と対立異文のみ）を表1から算出すれば表1・4のようになり、群立・対立関係を境界線で示せば図5のようになる。今、「グループA」の方は変種と見られる正徴本を除き、八本の異文対立（独自異文と対立異文のみ）を表1から算出すれば表1・5のようになり、群立・対立関係を境界線で示せば図6のようになる。これらと表3（1）の⁽²⁶⁾関係距離数を勘案すると次のような系統関係を想定することができる。

図 5

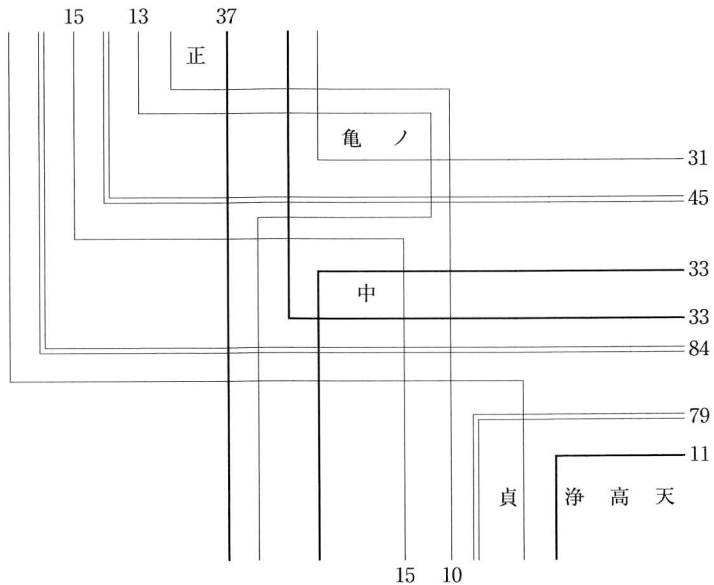


表 1.4

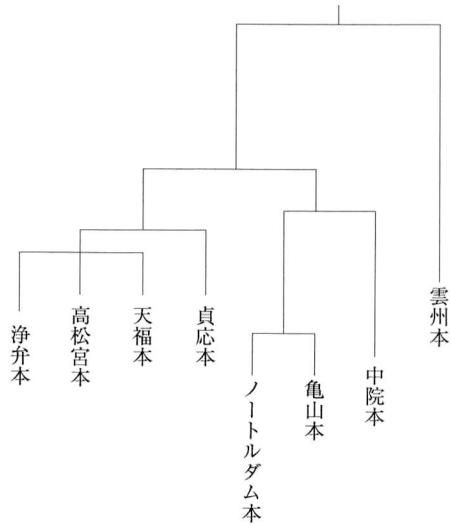
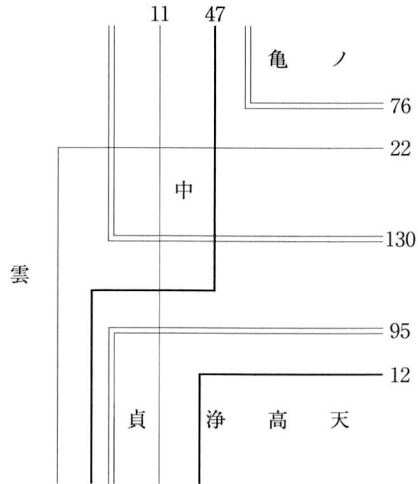
例数	分類	雲本	正本	中本	亀本	ノ本	貞本	浄本	高本	天本
1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
25	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
28	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
24	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
28	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
60	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
116	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
521	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1
84	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0
79	1	0	0	0	0	0	1	1	1	1
45	1	0	1	0	1	1	0	0	0	0
37	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1
33	1	0	0	1	0	0	1	1	1	1
33	1	0	0	1	1	1	0	0	0	0
31	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0
15	1	0	1	0	0	0	1	1	1	1
15	1	0	1	0	1	1	1	1	1	1
13	1	0	1	1	0	0	1	1	1	1
11	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1
10	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1
6	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1
5	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0
5	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0
4	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0
4	1	0	0	1	0	1	1	1	1	1
4	1	0	1	1	1	1	1	0	0	0
3	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
3	1	0	0	0	1	0	1	1	1	1
3	1	0	0	1	0	0	0	1	1	1
3	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0
3	1	0	1	0	0	1	1	1	1	1
2	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0
2	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0
2	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0
2	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0
2	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0
2	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1
2	1	0	1	1	1	1	1	0	1	1
2	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0
1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0
1	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0
1	1	0	0	1	1	0	1	1	1	1
1	1	0	0	1	1	1	0	1	1	1
1	1	0	0	1	1	1	1	0	0	0
1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	0	0	1	1	1	1	0	1	1
1	1	0	1	0	0	0	0	1	1	1
1	1	0	1	0	1	0	1	1	1	1
1	1	0	1	0	1	1	1	0	1	1
1	1	0	1	0	1	1	1	1	0	0
1	1	0	1	1	0	0	0	1	1	1
1	1	0	1	1	0	0	1	0	1	1
1	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0
1	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0
1	1	0	1	1	1	0	1	0	1	1
1	1	0	1	1	1	1	0	1	0	0

表 1.5

例数	分類	雲本	中本	亀本	ノ本	貞本	浄本	高本	天本
1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
27	0	0	0	0	0	0	1	0	0
35	0	0	0	0	0	1	0	0	0
27	0	0	0	0	1	0	0	0	0
28	0	0	0	1	0	0	0	0	0
66	0	0	1	0	0	0	0	0	0
610	0	0	1	1	1	1	1	1	1
130	1	0	1	1	1	0	0	0	0
95	1	0	0	0	0	1	1	1	1
76	1	0	0	1	1	0	0	0	0
47	1	0	1	0	0	1	1	1	1
22	1	0	0	1	1	1	1	1	1
12	1	0	0	0	0	0	1	1	1
11	1	0	1	1	1	0	1	1	1
5	1	0	1	0	1	0	0	0	0
5	1	0	1	1	1	1	0	0	0
4	1	0	0	1	0	1	1	1	1
4	1	0	1	0	0	0	1	1	1
4	1	0	1	0	1	1	1	1	1
4	1	0	1	1	0	0	0	0	0
3	1	0	0	0	0	0	0	1	1
3	1	0	0	0	1	1	1	1	1
3	1	0	1	1	0	1	1	1	1
3	1	0	1	1	1	1	0	1	1
2	1	0	0	0	0	1	1	0	0
2	1	0	0	1	0	0	1	0	0
2	1	0	1	0	0	1	0	0	0
2	1	0	1	1	1	1	1	0	0
1	1	0	0	0	1	1	0	0	0
1	1	0	0	1	1	1	0	1	1
1	1	0	0	1	1	1	1	0	0
1	1	0	1	0	0	0	1	0	0
1	1	0	1	0	0	1	0	1	1
1	1	0	1	0	1	1	0	0	0
1	1	0	1	1	0	1	0	1	1
1	1	0	1	1	1	0	1	0	0

図 6

注



(1)

『冷泉家時雨亭叢書 第三卷 後撰和歌集 天福二年本』平成
一六年六月、朝日新聞社。

(2)

本船重昭『後撰和歌集全釈』昭和六三年十一月、笠間書院。
片桐洋一校注『後撰和歌集』平成二年四月、岩波書店、新日
本古典文学大系 6。

(3)

工藤重矩校注『後撰和歌集』平成四年九月、和泉書院、和
泉古典叢書 3。

(4)

八三番歌の底本の表記は「とまらむ」とあり、工藤氏は「と
まらぬ」と本文を改めている。

(5)

「II『後撰和歌集』の本性 四『後撰和歌集』の伝本」(『古今
和歌集以後』笠間書院、平成二二年一〇月。初出は「後撰和
歌集の伝本」『女子大文学』17、昭四〇・一一)なお、「後撰
和歌集の本性」(『国語国文』昭和三一・五)以来の『後撰集』
に関する片桐氏の一連の論考は当該単行本に補説を加えて再
録されており、氏の、『後撰集』に対する現在の考えが示され
ている。

(6)

現代注の底本である天福二年本の本文がいわゆる非定家本系
諸本の本文と対立している他の多くの例の場合、解釈上問題
がない場合には校訂せずに底本文のままで校注を施してい

ることから、なるべく底本のままに、という校注方針が見て取れる。

(7) 片桐氏が述べたような定家の書写方針を鑑みるのであれば、工藤氏の処置が妥当であると思われる。ちなみに非定家本系諸本のうち、いわゆる二荒山本は当該部分が欠けているが、おそらくは「世をやはつくして」^{〔註〕}という本文を持っていたと思われる。

(8) 平安時代末期の碩学、藤原清輔による『袋草紙』にも以下の通りに記される。

この集未定にて止むと云々。仍りて本^し度^ど計^けなし。

(新日本古典文学大系『袋草紙』57頁、岩波書店、昭和六〇・一〇)

また、現存する『後撰集』の中で、最も本文が整っており、現代注の多くがその本文の底本に使用する天福二年本をはじめとして幾度も『後撰集』を書写した藤原定家も次のように述べている。

すべて此集、詞も作者の名も、おほやけごとゝも見えず。

最初草案とみゆ。いかなりける事にか。

(日本歌学大系別巻五『僻案抄』335頁、風間書房、昭五六年十一月)

(9) 注(3)所収の片桐氏の解説に簡潔に述べられている。

(10) 杉谷寿郎『後撰和歌集研究』第一章 後撰和歌集の研究と展望 第一節 総説(笠間書院、平成三年三月)

(11) 『王朝和歌集の研究』(叡松堂書店、昭一一年一〇月)、『勅撰

和歌集の研究』(日本電報通信社出版部、昭一九年一月)

(12) 『定家本三代集』解説(高松宮版、昭一六年二月)

(13) 『後撰和歌集の研究と資料』(新生社、昭四一年)

(14) 注(5)参照。

(15) 『後撰和歌集諸本の研究』(笠間書院、昭四六年三月)及び、

注(10)の前掲書。

(16) 『新編国歌大観』解題(角川書店、昭五八年二月)による。

(17) 諸本の本文異同を計測・集計する方法は、次の論文を参考にした。

宮澤俊雅氏「倭名類聚抄諸本の系統推定——十卷本卷三〇六を中心に——」

(北海道大学文学部 人文科学論集 十八号 昭和五七年三月) 同氏 「三宝絵諸本の親疎関係」

(史料と研究 高橋伸幸先生追悼号 第二六号 平成九年六月)

同氏 「伊勢物語百廿五段本諸本の親疎関係」

(北海道大学文学研究科紀要 一〇六 平成一四年二月)

(18) 注(15)参照。

(19) 第一帖は巻一〜四まで、第二帖は巻五〜八まで、第三帖は巻九〜十を書写。ただし複製本解説(山田孝雄『後撰和歌集 三』(古典保存会) 所収)によると、もともとは一帖で、上・下二

冊の上冊にあたるとする。

(20) 巻二十までの完本であったが、昭和二十年、戦災により消失。

(21) 注(16)参照。

(22) 杉谷氏の、定家年号本系統の本文について「承久本において

天福本に至る基礎が置かれ、貞応元年七月本に至って定着を見ているが、定家の校訂は一筋の発展だけではなく揺れ動きがあり、行き戻り現象すらある」という指摘もある。「後撰集定家貞応元年九月三日書写本考」(「語文」第四十四輯、昭和五二・五)

(23)

注(16)参照。

(24)

同様に二荒山本を底本にした校本に小松茂美『後撰和歌集校本と研究』(昭三六年二月、誠信書房)があるが、二荒山本は上巻だけの零本であるため、当然の事ながら巻十までの校異であり、巻十一以降は天福二年本(日本大学図書館蔵冷泉為相筆)と堀河本を上下段に並べて示すにとどまっている。

(25)

データ多量につき、都合上本誌次号132号に掲載。

当該の校合にあたっては二荒山本を底本とし、高橋良雄・杉谷寿郎『二荒山神社本 後撰和哥集』(昭和六二年、桜楓社)所収の影印を用いた。また以下の方針にしたがって、異文数を分類及び集計した。

※歌順及び歌番号は『新編国歌大観』(角川書店、昭和五十八・

二)所収の定家筆天福二年三月本を忠実に書写した日本大学総合図書館蔵の定家孫冷泉為相筆本のものによる。ただし定家の貞応本及び天福二年本などには四五〇番歌の次の「かみなつきしくれはかりはふらすしてゆきかてにさへなとかなるらん」を欠く。その為、『新編国歌大観』においても当該歌以後には旧国歌大観番号を併記しているが、集計の為に作成した資料においても、それ以降の歌には旧国歌

大観の番号を使用する。諸本間で歌順の前後相違がある場合には、その状況を示し、異文数として計上した。

※この分類・集計から得られた調査結果をまとめた表1に計上した異文数は、原則として、今回の調査の対象とした十二本全てに本文が現存している場合にのみ計上した。

※現時点では、ミセケチが付けられているものに関しては本文の採択は判断保留とし、異文数には数えていない。

※補入については、底本は便宜的に校訂された方を採用したが、ミセケチの例と同様に異文数には数えなかった。

※イ文書き入れについては、書き入れ前の文字を本文とした。※「延喜御時」が「延喜の御時」になるなどの当然「の」を読み添えると思われる場合の文字の省略と、「る」と「り」文字の異文については、異文とはとらないこととした。

※底本及び諸本の書写面に、虫損や剝落のある場合には、*で示し、異文数を計上する際の異同の確認の対象からは取り除いた。

※底本及び諸本の錯簡等による欠文・欠歌については、その状況を示し、異文数として計上した。

(26)

注(17)宮澤氏「伊勢物語百廿五段本諸本の親疎関係」による。

起点となる本から当該本の分岐点までの距離＝本線距離

|| a + b - c

分岐から当該本までの距離＝支線距離 || b + c | a

a 起点となる本と終点となる本の異文数

b 起点となる本と当該本との異文数

c 終点となる本と当該本との異文数

(やなぎた けんいち・北海道大学大学院博士課程修了)

表2 『後撰和歌集』諸本の相互異文数（巻一～十）

異 独 文 数 自		二 本	片 本	堀 本	雲 本	正 本	中 本	亀 本	ノ 本	貞 本	浄 本	高 本	天 本
172	二本	0	709	1556	1432	1266	1232	1276	1268	1233	1226	1212	1211
144	片本	709	0	1559	1394	1255	1199	1229	1221	1202	1205	1182	1181
381	堀本	1556	1559	0	1277	1325	1291	1291	1294	1295	1308	1285	1284
217	雲本	1432	1394	1277	0	1045	1021	1024	1021	964	972	944	943
57	正本	1266	1255	1325	1045	0	493	395	381	595	598	573	572
39	中本	1232	1199	1291	1021	493	0	338	325	474	465	437	436
22	亀本	1276	1229	1291	1024	395	338	0	108	548	544	521	520
15	ノ本	1268	1221	1294	1021	381	325	108	0	535	543	516	515
17	貞本	1233	1202	1295	964	595	474	548	535	0	140	107	107
16	浄本	1226	1205	1308	972	598	465	544	543	140	0	54	53
1	高本	1212	1182	1285	944	573	437	521	516	107	54	0	2
0	天本	1211	1181	1284	943	572	436	520	515	107	53	2	0

表3 『後撰和歌集』諸本（巻一～巻十）の関係距離数

	二 本	天 本	距本 離線	距支 離線
二本	0	1211	0	0
片本	709	1181	636	789
堀本	1556	1284	1493	1629
雲本	1432	943	1700	1164
正本	1266	572	1905	627
中本	1232	436	2007	457
亀本	1276	520	1967	585
ノ本	1268	515	1964	572
貞本	1233	107	2337	129
浄本	1226	53	2384	68
高本	1212	2	2421	3
天本	1211	0	2422	0

	片 本	天 本	距本 離線	距支 離線
片本	0	1181	0	0
二本	709	1211	679	739
堀本	1559	1284	1456	1662
雲本	1394	943	1632	1156
正本	1255	572	1864	656
中本	1199	436	1944	454
亀本	1229	520	1890	568
ノ本	1221	515	1887	555
貞本	1202	107	2276	128
浄本	1205	53	2333	77
高本	1182	2	2361	3
天本	1181	0	2362	0

	堀 本	天 本	距本 離線	距支 離線
堀本	0	1284	0	0
二本	1556	1211	1629	1493
片本	1559	1181	1662	1456
雲本	1277	943	1618	602
正本	1325	572	2037	613
中本	1291	436	2139	443
亀本	1291	520	2055	527
ノ本	1294	515	2063	525
貞本	1295	107	2475	118
浄本	1308	53	2539	77
高本	1285	2	2567	3
天本	1284	0	2568	0

	雲 本	天 本	距本 離線	距支 離線
雲本	0	943	0	0
二本	1432	1211	1164	1700
片本	1394	1181	1156	1632
堀本	1277	1284	936	1618
正本	1045	572	1416	674
中本	1021	436	1528	514
亀本	1024	520	1447	601
ノ本	1021	515	1449	593
貞本	964	107	1800	128
浄本	972	53	1862	82
高本	944	2	1885	3
天本	943	0	1886	0